

移住者と市長との「“本気”で語ろう会」 会議録

団体名	移住者
日時	平成 28 年 10 月 23 日（日） 11 時 00 分から 13 時 30 分まで
場所	移住者宅
参加者	空き家バンク登録者（大園氏）移住者（井上 亮氏外 5 名）
	市長、市長公室長、地域活力推進課長外

○市長あいさつ

- ・全国的に移住定住策が進められている中で、いかに地域外から移住者を取り込むか、各自治体は競争している。その中で鹿屋市を選んでいただいて感謝している。
- ・移住定住施策としていろいろな優遇策があり、本市も改修補助や家賃補助等、他市に負けない制度を持っている。
- ・皆さんには、本市を選んでいただいた動機や鹿屋市の魅力など、貴重な意見をいただき、今後の本市の施策に生かしていければと思っている。

○意見交換

市長： それぞれの思いや事情等があって移住してこられたかと思う。神奈川の大都市から田舎に来て真逆の生活になった方もおられるが、都会の生活が嫌になったのか、これまでの生活とは全く変わったこれからを自分の人生として生きていくという思いで移住に至ったのかをお聞きしたい。

佐藤： 都会生活が嫌になったという点はきっかけになっている。渋滞や満員電車で疲れたということもある。鹿児島市でも車の渋滞はある。鹿屋市が一番暮らしやすいと思った。

井上： きっかけはいくつもある。仕事に限界を感じたのもその一つ。都会の生活に息苦しさも感じた。仕事はもういいかなと思っていたが、こちらに住んでみて、大家さんとも非常に良い関係を持ちながら、地域の方々のお手伝い等をしながら忙しく過ごしているが満足している。

市長： 島根県から移住され、これまで魚も美味しくいいところであったのではと思うが、鹿屋市に移住されたきっかけは。

船木： 九州は気候が温暖で、南に下るほど、人も陽気になってくるのを感じた。寒いのが苦手でもあったことが原因。魚は島根県が一番おいしいのではと思うが、こちらは、肉や野菜がとてもおいしいと感じる。

市長： 黒豚のしゃぶしゃぶはぜひ味わっていただきたい。

全国に1,800の自治体がある中で、なぜ鹿屋市に行き当たったのか？ほかの自治体と同様、市も東京の移住セミナーに参加したりしているが、これから情報発信を進めていく中で、どんな方法が一番良いかを考えている。一番良いのは皆さんにSNSを通して鹿屋市の良さをPRしてもらうことかと思う。

鹿屋市に出会ったきっかけは何か。

佐藤： 福岡県で働いていた。出張で鹿児島県に来たことがあり、九州で一番好きな県になった。そのときは大隅を訪れる機会がなかったが、都会に帰って移住を考え始めたときに、大隅地区に行きたいと思うようになった。

市長： 移住先を選ぶ時に、優遇制度等が一つの基準になっているのか。

佐藤： お金のことを考えるのであれば都会に住み続けると思う。地元を出た子供が、一旦都会に出た後に帰って来られるようなまちづくりが必要ではないかと思う。

市長： 高校生が県外に出て行くと帰ってこない。こちらは誰もが顔見知りで、誰かに監視されている感じもあり、しがらみ社会という面がある。都会はプライバシーを保つことができ、何をやるのも自由という面がある。

また、地元に残った高校生が数年後に都会に出て行った友達と成人式で会うと、都会に行った友達はおしゃれをしていて、お金を持っている。地元に残っている者は、それに憧れて都会に出ていってしまう。

地元で暮らす人や我々が地元の良さを教育を通して高校生に伝えていくべき。お金が全てという世の中の価値観、生き方を変えるなど、長いスパンで考えていくことが必要だと思う。

佐藤： 一旦都会に出て行くことも必要かと思うが、そのあとに帰って来られる場所づくりが必要だと思う。

市長： 移住にあたっては、大型機械の免許等を持っていればこちらでも仕事の範囲が広がると思うが、ある程度、仕事確保の目途をつけてから移住する必要があるかと思う。

そういう面で苦労されたか。

佐藤： 都会は家賃が高い。こちらは仕事の賃金は低いですが、総合的に見るとそんなにお金もかからない。

井上： 移住先の条件として、今まで都会暮らしで育ってきたため、本当の田舎では暮らしていけないと考えていた。

鹿屋市はある程度都会で利便性もあって、移住先の条件を満たしていた。自然もいっぱいあるし、都会的な環境もある。

農業に従事している方でも、一部の方はかなりの所得を得ているようである。そういった面でもアピールすれば、鹿屋市に移住者も増えるのではないかと思う。

市長： 農業も昔と異なり、法人経営で大きくやっている方もいる。

農業をやりたいという方は、そういうところで雇用されたり、季節労働として働いたり、加工をしたりと仕事もいろいろある。ただ賃金が低いというのが現状である。

船木： 島根県で住んでいたところでは、土地があまり残っていなかった。鹿屋市に来て、農地がいっぱいあることに将来性を感じた。トラクターが道路を走っているのを見てびっくりした。また、島根県のスーパーでは、鹿児島島の野菜が並んでいた。

串良でも農業が集約されていて、大規模集約型の農業をやるのであれば適地であると感じた。

移住情報については、これからは SNS だと思う。移住先の情報をインターネットで探してみて、九州地区でこちらが必要な情報が出ていたのは、鹿児島県内では、大崎町と鹿屋市だけであった。

空き家バンクの情報もたくさん出ていて、物件の間取りや部屋の状況等、具体的に把握できたのは鹿屋市だけだった。先程の優遇策についても、家屋の改修補助は助かった面もあるが、助成金を目当てに来た人は、それを目当てにまた、他の市へ移住していくのではないかと思う。

あんまり助成金を重視しない方が良いと思う。移住してくる人の質が落ちる。

川口： 鹿屋市は志布志に近い。バイク乗りにはアクセスが良い。そういう魅力をアピールしてはどうか。

市長： 市には全国で唯一の体育単科大学、鹿屋体育大学がある。夏休みにはたくさんさんの合宿が行われる。鹿屋体育大学のネットワークはすごいものがあり、年間 28,000 人が来る。ただし、お金が落ちる仕組みにはなっていない。

スポーツ合宿でプロに来てもらうには、それなりに設備投資をした施設が必要なので、どちらかというところと社会人や大学の同好会をターゲットにしていきたい。また、ちびっ子もターゲットになる。

鹿屋市はスポーツの町でもあり、自転車の 100 キロレースもある。いろいろ楽しんでもらいたい。

鹿屋市は全国誌のアエラでも移住しやすい街のベスト 110 に入っている。そのときの評価は程良い田舎都市である。病院も学校も揃っている。

皆さんはこちらに来てまだ 1 年になっていないが、地域の方々の支援はどうか。

船木： 近所の方々がとてもよくしてくれる。地域の料理をいただいたり、作り方を教えてもらったりしている。

市長： こちらは、分かち合いの文化である。独り占めにしないで、おすそ分けをする文化が残っている。

船木： 職場の若い女性が地元から出たくないと話すのを聞くと、やっぱりとても暮らしやすいところなのだなと思う。

市長： 空き家バンクのサイトに移住者の皆さんの暮らしぶり等を掲載するのも良いのではないかな。

鹿屋は今、年間 300 人位人口が減少している。子育て環境や教育環境に力を入れている。

船木： 職場の同僚は、ラウンドワンなどに遊びに行くようだ。

市長： 高校生議会でもそのような施設を作ってくれと要望があった。

都城市でも地元商店街が疲弊している。人口 10 万人の都市で大型商業施設を持つことはなかなか難しいものがある。

施設を作れない代わりに、何か別な方法、例えば動物園の入場券を配る等の方法を考えていく必要がある。何もかも作るというわけにはいかない。

遊び方もいろいろある。ここには無尽蔵の自然もあり、トレッキング等の遊びもある。

船木： 鹿屋は人口の動態を見ると、人が集まってきているような感じがする。

市長： 私は広域連携を積極的に進めるまちづくりを考えている。大隅で 24 万人の人口があり、そのうちの 43%が鹿屋市に集まっている。みなさん驚かれるのは、この人口 10 万人の市に高校が 6 つあるということ。ここには病院も福祉施設も多数あり、特に中型の商業施設が多い。鹿屋市のみではなく、大隅地区全体の人口減少を食い止めることが必要。鹿児島市まで行かなくても鹿屋市である程度事が済むようなかたちにしていきたい。

ここは大事なまちである。産業はほとんどない。霧島市には大学、京セラ、ソニー、薩摩川内市には原発があり、京セラがあつて中越パルプがある。

船木： 街並みは鹿屋市がいいと思う。ここに住んでみて感じたのは、遺跡や戦跡がとても多いこと。ただ、案内の看板がわかりにくい。遺跡をもっとアピールするべき。現状では探してもわからない。考古学が好きな人はたくさんいるのもったいない。

田の神さまもこちらにはたくさんあるようだが、探せない。

島根では人型の田の神さまはいなかった。もっと情報発信してほしい。

市長： 目からうろこの話しである。我々が普通と思っていることが魅力であつたりする。田の神様は広報で特集してみるのもいい。

船木： 知覧は有名だが、鹿屋市の特攻基地は知らなかった。串良の平和公園も知らなかった。

市長： 知覧は観光施設になっているが、鹿屋市の基地史料館は、自衛隊の隊員向けの教育施設になっているため、なかなか大きく宣伝していない。資料は1級品である。

佐藤： 基地の中は入りにくいので史料館には行っていない。

船木： 串良の歴史史料館はホールの隅っこに雑然と置かれていてとても残念である。

市長総括

これからも、皆さんの力を借りて移住者を増やしていきたいと考えている。

こういう機会を年に1～2回は設けて意見交換をさせていただければと思う。

我々もせっかく移住していただいたからには長く住んでいただけるように努めたい。